雨音の記憶

常磐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨音の記憶

【コード】

N9309Z

【作者名】

常磐

【あらすじ】

小さな町の片隅で貸本屋の雇われ店長をしているトーコ。秋雨とともに訪れた客。5年ぶりの再会は、愛しくも哀しい波乱の幕開けだった。

「・・・やっとみつけた」「もう逃がさない」「・・・ぼくのこときらい？」私には、あなたに言えない秘密がある。

<<個人的にツボな妄想を、まったり形にしてゆく予定です>>

秋雨（前書き）

連作短編にする予定（は未定・・・）

秋雨

その日は、朝から雨だった。

霧のように細やかな水滴は、ヴェールのように辺りを覆う。

小さな街の片隅の、奥まった路地にひっそりと佇むトーコの貸本屋は、しとどに濡れて黒く、重い何かに押し掛かっているようだった。

軒先の洒落た、でも充分に古びたアーチに小さな水は降り積もり、身を寄せ合って流線を滑り降りている。ぼつり、ぼつりと気まぐれに地面に跳ねた。

からん からん

トーコが驚いて振り返ったのは、もう店仕舞いをしようとしていた時に来た客にはなく、来客を告げる鐘をここ数日ぶりに聞いたためでもなく、壊れそうなほど軋んでいたドアが音もなく開いたからだった。

ゆっくりと丁寧に扉が閉められ、小さく鐘が最後にからんと鳴った。

「……いらっしやいませ」

戸口に佇むお客。

驚いたとはいえ、数日ぶりのお客。せつかくのお客だ。

とっておきの営業スマイルで微笑んだ。

「雨の中、ご来店ありがとうございます。ゆっくりしてってくださいね」

全身濡れ鼠のお客は、一瞬びくりとしたようだった。

そうしてしばらくその場に躊躇した後、突然ものすごい勢いで近づいてきた。

かつかつかつと革靴の底が鳴る。

その硬質な音に、トーコはこの客がこの辺りに住まうような人物でないことに気が付いた。単なる町民が、庶民の約1ヶ月ほどの給金と同程度の「特殊な金属」を靴底に埋め込めるはずがない。

風に舞うローブは、雨に濡れて変色してはいたが明らかに素材の良いものだ。動きに合わせて、腰に挿した装飾度の高い剣と腰帯が見える。こちらの音がしないのは、腰に手をあてているためか。

腰に手を……。剣に……？

剣に手を……!？

ひゅつと喉が鳴った。トーコが命の危機を感じたのは、客が目の前に到達するコンマ5秒前だった。なんの抵抗もできず、思わず目をつぶる。それが精一杯。無念。

「……………」

あれ？構えた衝撃が訪れず、トーコは恐る恐る目を開ける。

そこには、わずか10センチ前で見下ろしてくる背の高い男性がひとり。

「……………あの……………」

近い。近すぎる。とりあえず近すぎる。他人との距離感は何々人それぞれだけど、その範囲は普通に陵駕してる間違いないくらい近い。第一背の差があるから顔もろくに見えない。顔を見るとなると近すぎるから角度がえらいことになる。首が……………。

とりあえず距離をとることにした。後ろに1歩逃げる。

「!」

なぜ同じ状況になっているのですか!?!一瞬で間合いを詰めたのですか!?!なぜこの距離である必要が!?!近すぎるでしょ。よく考えてください。近すぎるでしょう!?!

心の悲鳴を上げながら、トーコは背後に逃げた。逃げても逃げてもぴたりと間合いを詰められた。

しまいには、壁際に追い詰められた。

くすんだ木目の壁に背を押し付け、少しでも距離を稼ごうとしながら、トーコは努めて平静になろうと何度か大きく呼吸をする。

「……………あの、少し、離れて、いただけませんか」

「いやだ」

驚いた。

客の第一声がそれなのもビックリだが、その声が余りに若く、甘く、懐かしい香りに満ち溢れていたからだ。上質なビロウドのような低音。トーコの心の琴線に、ずっとずっと奥深くに仕舞い込んで厳重に鍵をかけていた何かに、触れた。

「やっと・・・みつけたんだ」

彼は、しぼり出すように言った。頭を揺すって、顔にまでかかっていたフードを落とす。藍色のローブの下に現れたのは、深い漆黒の髪。繊細な鼻筋に、震える唇。美神アポロのように完璧に整った容貌の中に、潤んだ紅い瞳。

「やっと、やっと・・・」

震える吐息が、耳元に落ちる。

長い背を折り曲げた彼は、ゆっくりと右手をトーコの耳の横の壁に付いた。ふわりと頬を風がなでる。トーコは、彼の瞳から目を離せなかった。鮮烈な赤。

「やっと、みつけた」

赤に囚われたまま、左の耳にも風圧を感じた。気づいたら、壁に縫い付けられていた。覆い被さるように彼はトーコを閉じ込め、視界

には彼しか存在しない。

逃げ場は、塞がれていた。

「もう、逃げられないよ」

紅玉は伶俐で美しかった。強い光を帯びた宝石は、同時に孤独に泣いていた。傲慢なまでの独占欲と、哀しいほどの希求が共存していた。トーコはその奥底に、幼い少年の姿を見た。

「もう、逃がさないからね。・・・遠子」

正確に、名を呼ばれた。

この5年、彼の元を去ってから一度も呼ばれたことの無い響き。この孤独な少年に、自分が唯一与えてあげたもの。何も持っていない自分の、唯一のもの。そして、もう一つ・・・。

「呼んで」

彼は、瞬きもせずトーコを見つめていた。

「呼んで、遠子。ぼくの名を」

見ない間に、背が伸びた。昔は、ずっとトーコより小さかった。小さくて、華奢で、孤独に震えていた。でも、大地に凜と立っていた。その強さに惹かれた。寂しさに共感し、優しさを共有し、二人で未来を夢見た。

自分の醜さに気づくまで。

ふるふるとトーコは首を振った。濃い琥珀色の髪が耳を打つ。同色の瞳を、睫毛の下に隠す。

故郷では、とてもありふれていた色彩。父も母も姉も妹も、同級生も近所の人も、電車の中の人もテレヴィの中の人も、濃淡はあれど皆同じ色をまもっていた。

それがこの世界では異色だった。忌まれる色だった。彼に逢うまで知らなかった。否、この世界に「飛ばされ」なければ、一生知ることはなかった。

「・・・ねえ、遠子」

俯いて隠されたトーコの顔を、優しい指先がすくい上げる。そっと髪を耳にかけられた。あくまで繊細なその指先は、微かに震えていた。

「遠子はもう・・・ぼくのこときらい？」

飛び跳ねるように顔を上げた。

間近で見た紅い瞳は、5年前と変わらず澄んでいた。孤独に凍える水。そして、豪胆な灼熱の炎。冷たさと熱さが共に並び立つ、不可思議な紅玉。5年前よりも、強くなった。その光。心を切り裂く、冷たく熱い光。

・・・とらわれる・・・。

「・・・あ、きら。・・・暁」

トーコの唇が彼の名を刻むと同時に、腕の中に捕らえられた。強い力に押し潰される。ぎゅうぎゅうに押し付けられる胸板は、記憶にあるよりずっと厚く広い。もう逃さないかのように、頭と体を広い腕ですっぽりと包み込まれた。

「・・・んっ・・・」

苦しさに、身じろぎする。予想以上に大きく育った彼には、トーコの抵抗など全く歯が立たなかった。頬に胸の飾りが当たって少し痛い。微かに頭を振るが、返ってより強く押し付けられるに至った。

「・・・とおこ。とおことおこ遠子」

頭上に触れた唇より、注がれる自分の名前。

狂おしいその響きは、泣きそうに揺れていた。

「ごめん、ごめんね遠子。きみがぼくをきらいになっても、もう逃がしてあげれない。もう逃げられないよ。もうだめなんだ。きみがないとだめなんだ。ぼくは、きみがいないと、だめなんだ。ごめんね。やっと見つけた、もう逃がさない。ぼくの遠子」

涙があふれた。

次から次へとあふれてくる涙は、外の霧雨よりも重く、しとどに彼の胸まで濡らした。

その冷たさに、びくりと肩が揺れる。腕に閉じ込めた強引さとは反対に、彼は恐る恐るトーコの顔を覗き込んだ。

「……泣いて、るの？」

そう言う彼の方が、泣いているようだった。涙こそ出てはいないが、彼の紅玉は雄弁に、その心を語る。

「……泣くほど、いや、だった……？」

自分の言葉で、自らを切り裂いているようだった。鮮烈な血を吹きながら、孤独に染まる赤。

「ちがつ……」

大きく頭を振る。縮こまる舌に、思うように出ない言葉に、焦りを感じる。震える手を、彼に伸ばす。視界に入った荒れた指先。急速に恥ずかしさを感じ、彼に触れる前に止めた。

「あ、きらを……暁を、きらうつわけない。私が、暁を……」

「じゃあ、好き？」

伸ばせなかった指先を、強引に取られた。大きな手で覆われ壁に押し付けられた。……また、縫いとめられる。今度は、両手もしつ

かり囚われた。

鼻が触れそうな距離で、見つめられる。

吐息が、お互いの口元にかかる。

紅い光彩の中に、捕らわれた自分が映っていた。

「ねえ、言つて。遠子。・・・ぼくのこと、好き？」

甘く請うる声。かすれたそれは、撫でるように首元に落ちた。切なく眇められた瞳。それは熱く、芯まで痺れさせるほどに熱く。彼から仄かに漂う香りは、トーコの神経を麻痺させた。

「・・・す」

その短い言葉を、最後まで言い終わる前に。熱い唇に空気を奪われた。

略奪者は、狂おしく唇を求め、強引に口内を犯し、大きな手のひらで後頭部を固定し、僅かな逃亡も許さなかった。熱い舌は生き物のように縦横無尽に動き回り、トーコの呼吸を全て食らい尽くす。

知らない。こんなの知らない。

初心者のトーコは、酸欠になるまで紅い瞳の狼に貪り食われ、混乱のまま意識を落とした。

だから、その後のことを彼女は知らない。

彼が、その独占欲のまま彼女に何重にも魔法の鎖を付けたのも。

名残惜しそうに濡れた唇をなめ、大切そうに抱きかかえて魔方陣を抜けたのも。

彼女が次に目覚めるのは、世界最強の男が作った鳥籠の中だということも。

まだ、知らない。

遠子20歳。 暁18歳。 秋雨の季節のおはなし。

秋雨（後書き）

ご感想いただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9309z/>

雨音の記憶

2011年12月29日01時49分発行